



3 海外活動

スリランカ 2008年

障がい者のための地域に根ざした職業訓練による自立支援事業

【平成19年度下期国際ボランティア貯金配分金助成事業】

2008年5月からスリランカゴール県内において120名の障がい者を対象にした職業訓練を開始。効果的な訓練を行うため現地協力団体 Hellabeem の施設を利用した合宿型訓練を実施した。2008年12月22日に修了式を行い、ひとりひとりに修了書を手渡し、習得技術で継続した所得活動を行うことを確認した。1月から3月にかけてフォローアップを実施し、所得確保ができるよう個々に指導を実施した。



事業概要

プロジェクトの目的

障がい者が小規模ビジネス実施に必要な知識と技術を身につけ収入を得るようになる
ビジネスグループを組織し、地域に根ざした持続可能な収入創出活動を行う

プロジェクト実施期間

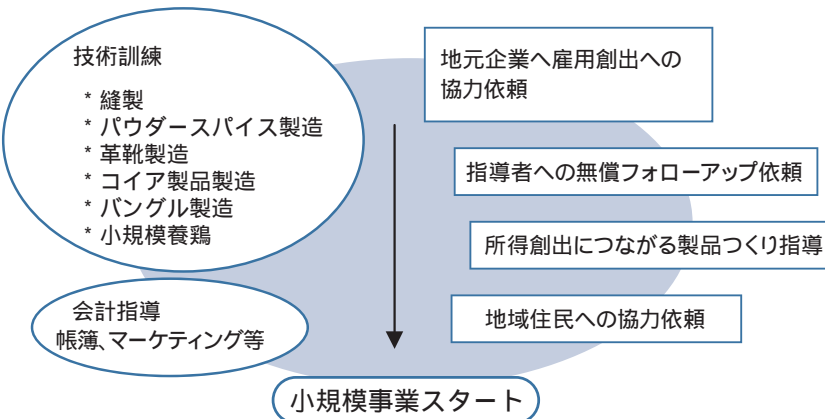
2008年5月～2009年3月

プロジェクト地域

スリランカ ゴール県 ハバラドゥワ市

対象者

ハバラドゥワ市59村落に居住する障がいを持つ18歳以上の男女120名



成果と課題

6つの技術指導を実施した結果、120名の受益者の約70%にあたる87名が習得技術により収入を得られるようになった。特に革靴製造、パウダースライス製造受講者は、地元企業からの雇用、下請け契約の協力が得ることができた。受益者からの要望が高かったコイヤ製品およびバングル製造は、品質が低いことから安価での買い取りが行われてしまう等の問題が発生し、思うように販売ができない状況が発生した。問題解決のため、補修クラスを開催する等で対応した。

受益者たちの要望を優先することは重要であるが、収入を確保するためのマーケットの開拓や技術不足を補うためのフォローアップ強化による収入安定化が課題である。

Ms. M.S. Krisangi Lakmaliさん (18歳)
縫製コース

目に障がいを持つLakmaliさんの夢は将来テーラーを開くこと。ご両親と2人の兄弟と生活をしていますが、家族の総収入は月に5000ルピー。

「Hellabeemの設備はとても充実していて、快適な生活ができました。トレーニングはとても良くて15日では短かったと思います。もう少し、いろいろな知識や技術が得られたらよいと思っています。デザインやトレンドの勉強もしてみたいです。」





スリランカ 2009年

知的障がい者のための地域に根ざした家庭菜園活動による自立促進支援事業 【平成20年度 国際ボランティア貯金配分金助成事業】

スリランカの障がい者全体の25%を占める知的障がい者は、周囲からの理解を得られないことが多く、日々の生活において家族や介護者への依存度も高い。また、家族も周囲の目を気にするあまり、自立への機会を与えない場合が多く見受けられる。

この状況を改善する為、家庭菜園活動を利用した知的障がい者の自立支援活動のプログラムの開発および専門指導員の育成を行い、家にこもりがちな障がい者やその家族に地域社会との接点を持つ機会を提供し、また本活動を通じ地域住民への障がいへの理解促進を行うことを目的に本事業を開始した。

事業概要

プロジェクトの目的

家庭菜園活動を通じ地域社会の接点を持ち、更に収穫物の家庭内消費及び余剰作物で収入を得るようになる。

プロジェクト実施期間

2009年4月～2010年3月

プロジェクト地域

スリランカ ゴール県(アクメーナ、ゴールフォークラベツ、イマドゥワ、ハバラドゥワ)

対象者

上記地域の知的障がい者とその保護者約400名

活動内容

専門指導員養成コースプログラム開発と指導者育成

プログラムはゴール県農業局、セラピスト、政府が運営する精神病院の協力を得て開発
専門指導員による障がい者への園芸指導

専門指導員養成コースを修了した指導者により、知的障がい者への菜園指導を行う。

保護者の意識改革に向けた啓発活動も実施

各家庭における家庭菜園づくり指導

受益者は5～10名程度のグループを組織し、専門指導員の指導のもと家庭菜園づくりに取り組む

モデル家庭菜園の設置

ゴール県内2カ所にモデル家庭菜園を設置し、知的障がい者がスタッフと共に管理運営を行う。またこれらのモデル菜園は一般にも公開

これまでの成果と今後の活動

訓練当初、土と触れ合うことに躊躇する受益者もいたが、現地スタッフや保護者による働きかけにより、受益者のうち90%が家庭菜園活動を継続している。菜園の収穫物を近所の人々と交換したり、市場への販売も徐々に行われ始めている。

合宿型訓練を行ったことにより、集団生活への戸惑いや混乱が見られた受益者もいたが、徐々にその環境に適応し、最終的には友達を作ることができた。また保護者もそれぞれの苦悩を分かち合うことができ、貴重な経験であったという感想が寄せられている。これらの繋がりを継続させるためにも、訓練期間中のグループ単位での集会などを定期的に行うよう指導を行っていく。

5日間の合宿型訓練の後、日常生活行動の向上が見られる受益者が増加しているが、継続的にモニタリングを実施し、本プログラムが受益者に与える効果の分析を行い、より充実したプログラム開発を目指す。



参加者の言葉



「この訓練に参加する機会を得られたことを、とても嬉しく思っています。土とふれあったり、エクササイズをしたりする活動を通して、自分の子供とどのように接したらいいかわかるようになりました。また、彼の反応をより良く理解することができるようになったと感じます。さらに、彼が自分で作業を行いたい、という意欲をうかがうことができました。このプログラムは、子供の成長を促すものであったと思います。今後は、彼を甘やかして手を貸すばかりではなく、成長と自立を促せるような接し方をしたいと思っています。」

-- 参加者の母親 --

「これまでに学校児童への指導経験はあったが、知的障がい児への指導はしたことがなかった。しかし、このプログラムを通じて実感したのは、障がいの有無による違いはあまりないことだった。ただ、保護者が児童を心配するあまり、手を貸しすぎることもあり、私たちは児童とその保護者に別々の作業をしてもらうことを心がけた」

-- 専門指導員 --



ニジェール 2008年

栄養失調児健康改善支援事業 終了

【平成19年度上期国際ボランティア貯金配分金助成事業】

【日本国際協力財団平成19年度 国際協力NPO助成事業】

ニジェール共和国タウア州において栄養失調児を持つ母親を対象に実施した栽培指導と食糧生産、母子保健知識と離乳食の普及活動の2事業が2008年7月に終了した。両事業とも母親たちの積極的な参加により、衛生・栄養・健康の基本的な知識習得の重要性を認識してもらうことができた。



事業概要

プロジェクトの目的

栄養失調児の健康改善のための食糧生産と栽培指導および母親への母子保健知識と離乳食の普及

プロジェクト実施期間

2007年9月～2008年7月

プロジェクト地域と対象者

タマ行政区ラダマ、タボエ、トンフォフィの各村20名の母親
(合計60名)
カロファン地区 ダメイディ、カンカラ、ピンガワラの各村16名の母親
(合計48名)

活動内容

母親グループの組織化
母親グループへの栄養・保健衛生の基礎知識指導
農地に簡易井戸設置
収穫物による離乳食および栄養補助食の調理指導
グループ内での収穫物保管指導

活動の成果

各村において8名の母親を1組とし、1ヘクタールの農地を割り当て2基の簡易井戸を設置し、ミレット、たまねぎ、じゃがいも、かぼちゃなどの栽培指導を実施した。その結果、収穫期が終わる4月末まで順調に野菜の収穫が行われ、余剰分は市場への販売ができるまでになった。収穫物は乾燥させた状態にして市場に売られるなどの工夫が見られた。この活動により日々の生活費の一部を稼ぐことができ、得たお金で穀物を購入するなど生活の状態が向上している。

現地でとれる食物(ニエベ、ピーナツパウダーなど)を使って栄養価の高い離乳食の作り方の研修を実施した。母親たちに自分の子供たちの健康状態に関心を持ってもらい、栄養が高い食事を与える必要性を理解してもらった。新しい調理方法を習得するために時間を要したが、殆どの母親たちは習得に意欲的であった。

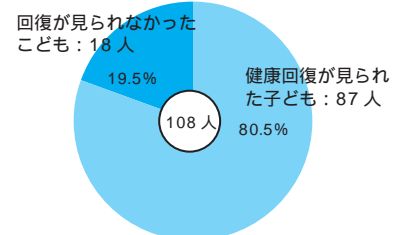
本事業では栄養失調児の健康改善のための食糧生産と栽培指導および母親への母子保健知識と離乳食の普及を目的とし活動を続けてきた結果、108名の母親の約80%にあたる87名の母親が抱える栄養失調児に健康状態の改善が見られた。事業参加者の108名の母親たちはアムルトが実施する乳幼児用栄養補助食の配給を受けていることもあり、健康状態の改善が短期間で行われたと考えられる。

今後の課題

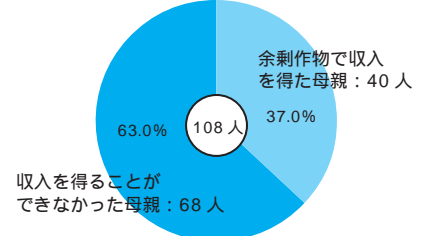
事業期間内に母親グループの組織化まで指導が至らなかったため、収穫後のグループ内での所得差への対応、収穫物の保存方法などについては今後のフォローアップで補足指導を行う予定である。

事業終了後に健康回復した子供たちが悪い状態に戻らないようにするためには、地域住民を指導者として育成し定期的な栄養保健指導が続けられるような環境整備が必要であり今後の課題となっている。

【健康回復】



【所得創出】





ニジェール 2009年

母親たちによるモデル集団農業の運営支援事業 【日本国際協力財団平成21年度 国際協力NPO助成事業】

アムルトは2009年に、生活環境が過酷で貧しい地域の一つであるティラベリ州において事業を開始した。

この地域は他地域に比べ作物の収穫量が低く、主食の穀物収穫後たった2、3カ月間しか食糧を家庭で自給することができない。そのため多くの男性は他国へ出稼ぎに行き、村には女性と小さな子供のみが取り残され、慢性的な飢えと貧困に苦しんでいる。この状況打破のため、彼女たちも夫の収入に頼っているだけでなく、自ら立ち上がり、グループをつくって、通常の農閑期（9月から4月）に他の作物栽培を始めようとしている姿が見られた。

この活動をより効果的また安定的にするために、アムルトは彼女たちを組織化し、技術と農具、灌漑設備を供給し、収入源にもなる作物を育てるための支援を行う。これにより、家庭の食糧自給の安定化を目指している。



事業概要

プロジェクトの目的

農閑期作物栽培を通して食の安全を保障する
女性の自立のために女性グループの能力を開発する

プロジェクト実施期間

2009年8月～2010年3月

プロジェクト地域

ティラベリ州ウラム県ウラム行政区とトンディキウエンディ行政区の3カ村

対象者

家族の長である母親および女性 約80名

活動内容

女性グループの結成
農閑期作物栽培指導（トマト、タマネギ、キャベツ、レタス、ピーマン、オクラ、ニンジン、カボチャなど）
灌漑設備の設置（井戸掘削、電動ポンプ供給）
野菜の種、農具、肥料配布
農具、電動ポンプ、種などの維持管理方法指導
女性グループの強化（農閑期作物栽培のための協力体制作り）

これまでの成果

農閑期作物栽培の訓練ではアムルトのスタッフが以下について指導を行った。

- ・ 苗床の準備
- ・ 水やり方法と水路の維持
- ・ 効果的な種まきと苗移植
- ・ 化学薬品に頼らない殺虫・防虫方法
- ・ 肥料の使用法

地域名	村落名	女性の人数	耕地面積 (ha)	設置もしくは配布されたもの
ウラム	Daley day	30	3	井戸(3基)、電動ポンプ(3台)、水タンク(16個)×(9個)、くまで(9個)、移植ごて(16個)
トンディキウエンディ	Daoudou Koira	25	1.5	種(トマト300g、ピーマン50g、キャベツ200g、タマネギ2kg、レタス500g、オクラ1.5kg、ニンジン3.76kg)
	Zarababa Koira	25	1.5	肥料(350kg) 指導と啓発

専門家による的確な指導とアドバイスの結果、萌芽期の

成長の質が向上した。そして、イナゴやイモムシの襲撃に見舞われても、天然製法の殺虫・防虫剤によって作物を守ることができた。本事業の受益者であった全ての女性が、こうした技術の発展と成果に満足することができた。

課題と解決策

本事業における課題は水供給に関するものである。計画当初、3カ村には8基の簡易井戸を建設する予定であった。しかしながら、建設予定であった地域の土が粘土を多く含み、簡易井戸の設備では必要な水量の確保が不可能であることが判明した。そこで、土木技師との協議を重ねた結果、簡易井戸ではなく近代化井戸を掘削することによって問題を解決することになった。近代化井戸の建設には費用がかさんでしまったため、井戸の数を減らさなければならず、最終的に建設されたのは3基のみである。

水の確保が困難な状況で、受益者である女性たちは井戸の建設に必要な資材（砂や砂利など）を運ぶなどして互いに協力し合った。このような共同作業の結果、女性グループの結束は強まった。





ニジェール 2009年

タウア州ブザ県村落部における乳幼児健康改善のための保健衛生教育および生活改善モデル事業【日本国際協力機構 草の根技術協力事業】

ブザ県における5年間の活動経験によって、アムルトは栄養失調児に対する衛生・栄養・健康の基本的な知識についての啓発活動を継続的に実施することの重要性を認識した。また、現地のコミュニティに根差した持続可能な教育活動を実践するために、母親の中から指導者を育成することも重要である。さらに、乳幼児の健康状態を改善するために、各家庭の所得創出活動を支えることも必要不可欠である。そのためにアムルト・ジャパンは国際協力機構（JICA）の草の根技術協力事業の一環として、タウア州ブザ県における女性グループの能力強化のための2年間の事業を開始した。

これまでの成果

10 コミュニティにおいてヘルス・トレーニング・グループ（以下 HTGs）が組織され、保健衛生・栄養啓蒙活動を自主的に運営するための HTGs に対する指導および母親や女性たちへの保健衛生・栄養指導を実施。

HTGsおよび受益者への研修

	テーマ	内容	実演	配布物
1回	衛生と健康	・水、食糧、身体、環境の衛生問題について ・不衛生な状況によって引き起こされる病気について	化学製品とフィルターによる浄水方法	マット(40枚)、椅子(50脚)、浄水用フィルター(510個)、石鹸(1,325個)、砂糖(80kg)、子供服(170着)、帽子(40個)、ビスケット(20個)、サンダル(90足)
2回	栄養と健康	・栄養素、栄養価について ・母乳育児について ・栄養価の高い離乳食について	栄養価の高い離乳食の作り方	豆(650kg)、ミレット(50kg)、石鹸(1080個)、砂糖(10kg)、ビスケット(10個)

母親や女性を対象にした研修は隔月で行われているが、研修がない月も自主的にレビューが実施されている。グループの組織力を高めるための工夫としてグループに名前を付けるなどの活動も自発的に行われるようになった。自主的に月に1度「掃除の日」を設け村の掃除をしたり、部屋や身なりを清潔に保つ受益者が増加していることから研修の成果が表れている。

HTGs からの提案で、家庭訪問の際の評価で最も研修内容を理解し、実践している母親、かつ講習会でも積極的に発言している母親を各グループでひとり選び【母親の女王様】として表彰することにした。この案を取り入れてから母親たちのやる気が俄然高まっている。

今後母親たちの高い意欲を維持していくための工夫をしながら、彼女たちが研修で得た知識を理解し、各家庭において実践できるよう指導を行っていく。

課題と解決策

・いくつかの HTGs が能力不足のために研修を実施する難しさに直面していた
この問題は母親リーダーの能力不足によるものであったため、グループとアムルトの話し合いによって次の2つの解決策が見出された。

読み書きや計算に関してより高い能力のある母親リーダーを再選出する（前任者は受益者として留まる） 4人の HTGs に受益者から選ばれた秘書を加え、研修をサポートする
これらの策を練ったことにより、HTGs の研修実施能力が強化された。

・受益者の何人かが研修に参加したことに対する日当を要求してきた
事業開始当初より、この研修は知識を得るためのものであり、お金を分け与えるためのものではないことを強調してきたので、彼らの要求には一切応じていない。しかしながら、研修にて培われた知識や能力を各家庭で実践してもらうために、浄水フィルターや石鹸などの物資は供給している。現在のところ、受益者の多くがこれに満足していると言える。ただし、この研修の重要性と事業の目的については、HTGs に対して継続的に説明をし、彼らのモチベーションを保つ必要がある。

事業概要

プロジェクトの目的

保健衛生・栄養啓蒙活動を自主的に運営できるヘルス・トレーニング・グループ（以下HTGs）の育成
母親や女性たちへの保健衛生・栄養指導
保健衛生・栄養改善活動に必要な経済基盤への支援

事業実施期間

2009年7月～2011年6月

事業実施地域

タウア州ブザ県内の10コミュニティ

対象者

栄養失調児を持つ母親500名（間接受益者：受益者の子ども750名）

活動内容

各コミュニティにて女性グループを結成
各女性グループより、HTGs（看護師1名、助産師1名、母親リーダー2名）を選出し、衛生・栄養・健康についての研修が実施できるよう訓練
HTGsが主導となり、衛生・栄養・健康についての研修と5歳以下の乳幼児に対する2カ月ごとの健康診断を実施
家庭訪問による個別面談“訪問研修”を実施
所得創出活動に関する調査





スーダン 2009 年

公衆衛生環境改善支援事業

【平成20年度 国際ボランティア貯金配分金助成事業】

2005年のスーダン南北間の包括的和平合意以来、南スーダンではさまざまな復興活動が実施されている。その結果、農村の市場には様々な商品が流通するようになり、地域社会の生活と復興の中心地として活気あふれる場となった。

しかしながら、市場における公共施設は未発達であり、トイレやゴミ処理施設の未整備による深刻な衛生環境悪化が問題となっている。

世界保健機構の2006年の調査によると、南スーダンでは1万人以上がコレラや急性水様性下痢症に感染しており、ジュバ市外の致死率は3.55%と報告されている。これらの病気は主に池や川、水たまりの水の利用が原因とされており、衛生習慣、環境の改善が緊急の課題となっている。これらの問題を受けて、本事業では市場の衛生環境の改善が目指される。



事業概要

プロジェクトの目的

市場にトイレ、井戸、ゴミ箱を設置する
衛生管理意識の向上によって、市場の衛生環境を改善する

プロジェクト期間

2009年5月～2009年12月

プロジェクト地域

ノーザン・バル・アル・ガザール州、アウェイル・イースト郡の
3市場(マルワルコン、ワンジョック、マドール)

対象者

3つの市場(マルワルコン、ワンジョック、マドール)事業者及び利用者
各3000人

活動内容

衛生管理委員会の設置

委員会メンバーと衛生普及員を対象に、公衆衛生の管理、推進のトレーニングを実施し、トイレ、ゴミ箱、井戸の管理およびキャンペーン実施のための指導を行う。

トイレ、ゴミ箱、井戸の設置と公衆衛生ワークショップ実施

3つの市場において公衆衛生に関わるワークショップを実施し、市場における衛生環境を改善する。住民参加による公衆衛生の改善と、市場の公衆衛生とトイレ、清潔な水の使用、市場の衛生管理の重要性を主なテーマとする。

公衆衛生キャンペーン実施

市場を利用する地域住民の公衆衛生意識の向上を目的として、委員会メンバーと普及員を中心に大規模な公衆衛生キャンペーンを実施。

成果と課題

各市場にトイレ、井戸、ゴミ箱の設置を行い、各市場で9回のトレーニング・ワークショップ、公衆衛生ワークショップ、公衆衛生キャンペーンを実施。キャンペーンなどの回数を重ねるごとに、衛生管理委員、普及員が自主的に参加者をリードしていく場面が多くなり、参加者も積極的にディスカッションで意見交換するなど、衛生への意識向上の効果を実感することができた。衛生管理員、普及員主導で実施した公衆衛生キャンペーンは、毎回100人近い参加者が集まり、定期的な市場の清掃と適切なゴミ処理の呼びかけが行われた。また、ワンジョック市場では井戸の周りに家畜よけの柵を作るなど、清潔な水の確保に努める人々の姿が見られるようになったことは、本事業の成果のひとつである。

公衆衛生キャンペーンでは多くの参加者が清掃器具を持っておらず、素手でゴミ拾いをせざるを得なかった。作業後の手洗いを励行してはいたが、清掃器具が購入され、継続的にキャンペーンが行われるよう体制を整えることが今後の課題である。



参加者の声

トレーニング、ワークショップで教わった内容は、病気に感染する可能性を減らすのに大いに役立つと思います。参加者は、研修で学んだ衛生に関する知識を、日常生活に活用し、不衛生な環境を改善していくでしょう。市場にトイレを設置することは、コレラやその他のハエが媒介する感染症の発生を減らす手段の1つとなり得ます。また、井戸の掘削は、水不足を解消し、井戸から得られる水で、掃除をしたり、食器を洗ったり、家庭で清潔な環境を維持することができるようになります。キャンペーンをとおして、生活環境をきれいにする意識が人々に浸透しています。自分達で、家や市場を掃除している光景が見られるようになりました。(マルワルコン市場衛生管理委員 Geng さん)



4 国内活動

2008年

ボランティア育成事業

スーダン 1 名、スリランカ 2 名のボランティア派遣

スリランカに赴任したボランティアは、障がい者を対象にした事業立案のための情報収集に従事し、スリランカ南部州における障がい者が置かれている状況について理解を深める機会を提供することができた。また、マイクロビジネストレーニングを終了した受益者たちの所得確保を目的に修得技術および商品の質の向上を目指すワークショップを開催し、受益者たちの販路拡大に貢献することができた。

スーダンでは、不衛生な水による感染症で死亡する人々多いことから衛生環境改善支援事業実施のための事前調査に携わっていただいた。

イベント出展

スリランカフェスティバル、グローバルフェスタ、アフリカンフェスタ等に参加

2008 年度は恒例のスリランカフェスティバル、グローバルフェスタ、アフリカンフェスタ、杉並うえるフェスタに加え、新たに三菱田辺製薬様主催のボランティアサロンにて活動の報告とともにスリランカの受益者たちの商品の展示販売を行った。



各イベントにおいては、海外ボランティアに関する問い合わせをたくさんいただいた。

その他

成蹊大学 第 47 回 櫛祭でスリランカ商品展示販売

昨年に引き続き成蹊大学国際協力サークル M.I.X. のメンバーに櫛祭でスリランカ津波被災女性および障がい者が製作した手作り小物の販売支援をしていただいた。昨年はマーケットリサーチを含む報告書を作成してくれ、本年度のスリランカ商品開発事業に貢献してくださった。メンバーのアイデアを取り入れた商品を含む売上は 10 万円となり、現地で手作り商品を作る女性たちに、更に商品の発注をすることができた。

報告会 & ワークショップ

アムルトジャパン活動報告会

12 月 6 日、渋谷区で活動報告会を開催。スリランカ障がい者自立支援、ニジェール事業完了報告、そして南部スーダンでの活動 10 周年を迎えたアムルトインターナショナルの活動の様子を報告した。また、今回新たな試みとして UNHCR 駐日事務所スタッフをゲストにお迎えし、スーダンの現状について参加者の皆様とともに学ぶ機会を提供した。



財団法人日本国際協力財団様主催活動報告会に参加

財団法人日本国際協力財団 (JICF) 主催の報告会にて助成いただいたニジェール栄養失調児健康改善支援事業についての報告機会をご提供いただいた。

アムルトジャパン独自ワークショップ開催 (ケニア大使館後援)

2008 年 8 月 2 日 (土) 横浜の ZAIM にてケニア大使館後援、(有) マエジのご協力でアフリカンセラミックピーズ KAZURI でオリジナルアクセサリーをつくるワークショップを開催。アムルトジャパンのニジェールでの活動、ケニアの魅力に参加者に紹介することができた。



スリランカ事業支援キャンペーン実施

スリランカ新規事業「障がい者のための職業訓練と自立支援」を実施するにあたり、不足している食費や合宿型訓練中に必要な物品のご寄付を皆様をお願いした結果、たくさんのご寄付と物品を頂戴することができた。

シーツ：27 枚、タオル：244 枚、石鹸：94 個、
歯ブラシ：79 本、くし：9 本、かみそり：20 本、
毛布：1 枚、ボールペン：150 本

ご寄付：136,900 円 (うち切手：6,900 円)

物品は各受益者に手渡し、ご寄付は合宿期間中の食費に充当致しました。ご協力ありがとうございました。



2009年

ワークショップ開催

スリランカレースでオリジナルグリーティングカード作り

スリランカの現状、アムルトの活動紹介を目的に、広尾・国際協力サロン（3月28日）および東京ウィメンズプラザのイベント（10月2日）として2回のオリジナルグリーティングカード作りを開催。約25名が参加したワークショップでは、「糸の宝石」とも言われるポピンレースを用いたステキなカードが出来上がり、スリランカの文化、津波被害を受けた現地の様子や障がい者のおかれている現状を知っていた。



スリランカカレー料理教室

フードコーディネーターとして活躍しているスリランカ人の山崎シルヴァ先生を講師に迎え、スリランカカレーの料理教室を開催した。

火にかける前のカレーを手で混ぜたり、大量の生姜を切って紅茶に入れたりするスリランカスタイルを学びながら、和気あいあいとした雰囲気の中で料理教室は進行し、野菜カレー、ミートカレー、パセリサラダ、タピオカプディング、ジンジャーティーの全5品が完成。また、スリランカ民族衣装のサリーやサロンの着付け体験もいただいた。参加者の皆さまからは「先生がとても素敵なお方だったのでとても楽しく過ごすことができました」、「とても簡単なので家でスリランカカレーを作ってみようと思います」といった感想が寄せられた。



報告会&写真展

アムルトジャパン活動報告会、ニジェール写真展を開催

12月1日、JICA地球ひろばにてアムルトジャパンが事業を展開しているニジェールとスーダンについて、これまでの活動とその成果や課題の報告会を開催した。ニジェールとスーダンで実施されている事業報告の他、青年海外協力隊（村落開発普及員）としてニジェールへ赴任されていた大島かおり氏をゲストスピーカーとしてお招きし、ニジェールにおける自らのご経験について、写真を交えながらご紹介いただいた。ご参加いただいた皆さまの中には、ニジェールもしくはスーダンにて在任経験のある方、これからニジェールへ行かれる方、国際協力で興味のある学生の方などがいらっしやり、質疑応答ではそれぞれが自らのご経験をシェアして下さるなど、とても活発な意見交換が行われた。



活動報告会開催時期にあわせ、日本での知名度があまり高くない「ニジェールについて多くの方々を知っていただきたい」という思いから写真展を開催した。

アムルトジャパンがニジェールでの事業を開始してから4年が経過し、これまでに井戸作り、食糧の配布、農業指導、栄養失調児のための健康改善事業などを実施してきた。それらの活動の合間にスタッフが撮影してきた写真は、躍動感にあふれるものが多く、活動的で表情豊かな人々の様子をうかがうことができた。写真展をご覧いただいた方々からは、「どの場所においても、その場所でみな一生懸命に働いているのですね」、「ニジェールという国はどこにあるのかさえないから、現状も何も知りませんでした。今回写真を通して、その様子が見られたことは大きな何かのきっかけとなりそうです」といった感想が寄せられた。

スリランカ・スタディツアー

成蹊大学国際協力サークル M.I.X. スリランカ訪問&報告会

3月7日から約1週間、成蹊大学国際協力サークル M.I.X. のメンバー4名がスリランカを訪問。以前から交流のあった障がい者施設を訪問し、学園祭のバザー売上で購入した家電製品を寄贈した。また、歩行障がい者のための職業訓練施設にて日本文化紹介のワークショップを実施した。施設の責任者であるヘレンさんより「ワークショップは施設利用者たちにとって日本文化を知る良い機会でした。日本の学生さんたちとの交流を心から楽しんでいました。またこのような機会を持っていたら嬉しいです」というお礼の言葉をいただいた。

6月24日 M.I.X. メンバーによるスタディツアーの報告会が成蹊大学文学部国際文化学科の授業の1コマを使って行われ、総勢160名の学生さんを前にスリランカの観光情報、アムルトジャパンが行っているマイクロビジネストレーニングの現場視察の様子が報告された。参加した国際文化学科の学生さんたちからは、「地域密着型支援の重要性を実感した」、「スリランカに行ってみたくなった」などの感想が寄せられ、大変有意義な報告会となった。





イベント出展

スリランカフェスティバル、グローバルフェスタ、アフリカンフェスタ等に参加

2009年度はアフリカンフェスタ、グローバルフェスタ、杉並うえるフェスタに参加。それぞれのイベント会場において、ニジェール、スリランカ、スーダンでの活動紹介を行うと共に、スリランカ津波被災女性や障がい者が制作した商品の展示販売を通してスリランカの現状紹介そして現地受益者たちの所得確保に貢献することができた。スーダン、ニジェールの海外ボランティアに関する問合せも多く、人々の興味がアフリカに向けられていることが伺え、今後のアフリカにおける支援活動の参考を得ることができた。

その他

成蹊大学 第48回櫛祭でスリランカ商品展示販売

成蹊大学の国際協力サークル M.I.X. が学園祭でレースやバングルを販売して下さった。これらの商品はマイクロビジネストレーニングによってスリランカの女性や障がいを持った方々が制作したもの。商品の中でも特にレースは幅広い年齢の女性に人気があった。成蹊大学の学園祭での出展は3回目となり、毎年楽しみにしてくださっているお客様もいるとのこと。スリランカ商品およびバザーの売上約12万円は、スリランカの障がい者施設「サンボディホーム」への寄附とスリランカへの商品発送費用に充当した。



インターン受入れ事業

2009年度は2名のインターン受入れを実施。

大貫 真理さん

私は平成21年4月から平成22年3月までの1年間、アムルトジャパンでインターンとして活動を行いました。主な活動として、スリランカ事業の国内調整、スリランカの女性が作るフェアトレード商品の受注発注や現地へのオーダー、新規助成金取得の為の申請書作成(一部)日本国内でイベント企画・実施に携わりました。

NGOの仕事内容というと、災害地や紛争地での物資の提供や、学校や病院等のハード建設という現場での活動に注目が集まりますが、その活動を支えているのは国内事務所での会計、総務、広報、資金獲得の為の申請書作成という事務作業であることはあまり知られていません。ここアムルトジャパンの事務所でもこうした多くの事務作業が現地の活動を支えています。

また、アムルトジャパンがスリランカで実施した「知的障がい者のための地域に根ざした家庭菜園活動による自立促進支援事業(平21.4~平22.3)」のモニタリング、事業評価、会計確認の為、平成21年11月と平成22年3月の計2回スリランカへ渡りました。事業の活動の一部として行われた家庭菜園指導トレーニングも見学することができ、事業の受益者(支援事業の対象者)と直接交流が持てたことがとても印象に残っています。日本で提出した事業提案書が多くの人を巻き込みプロジェクトとして形となり、日本から遠く離れたスリランカの地で人々の笑顔になる。こうした一連の流れに関わることがNGOで働くことの醍醐味の一つだと実感しました。

こうしてインターンとして国内、国外の活動に密に携わることにより、今まで漠然としか知らなかったNGOの仕組みを理解し、更にNGOの強みや課題を発見することもできました。



岡部 史織さん

私は協力隊員としてジンバブエとウガンダに赴任し、自分の思うままに現地での活動を進めていました。帰国後、アムルトジャパンにてインターンとなり、最初は日本の事務局にてデスクワークをしました。そこで、知らない国(スリランカ)で行われている事業について申請書や報告書を読み進めたものの、なかなか理解は深まりませんでした。スリランカに赴任し、日本事務局から書類を通して見えていたものと現地の様子とのギャップに困惑しました。

インターンとして、日本事務局と海外にて業務に携わったことで、申請書の作成や事業の報告、そして会計業務に至るまで、NGO/NPOでのお仕事の多くを学ばせていただきました。また、海外支援活動をするうえで、現地の様子を知っておくことの大切さ、また日本事務局と事業実施地域との連携の必要性、そして国境を越えてコンセンサスを取ることの難しさと重要性を痛感しました。今後もアムルトジャパンのサポーターとしてその活動のお手伝いをしつつ、私なりの国際協力の道を邁進していきたいと考えています。

*国際協力機構(以下JICA)が実施する「帰国隊員NGO活動支援事業」を活用した受入れ





5 計画

2010 年度事業計画概要

本年度は更にアムルトジャパン独自の事業実施拡大に加え会員および支援活動への協力者獲得の推進を図ります。

ニジェール支援事業

ニジェールでは2007年にスタートした栄養失調児支援事業を継続し、更に栄養失調児健康改善のための母親への保健啓発活動および母親たちの農業活動および所得創出活動を通じた組織化促進のための事業を継続実施する。また、独立行政法人国際協力機構（JICA）の草の根技術協力事業として栄養失調児の健康状態改善のための支援事業を2年目の事業計画に沿って実施する。

南スーダン支援事業

現地では農業技術および農業指導専門家の必要性が高いことを受け、日本人農業専門家の派遣を検討する。

スリランカ支援事業

スリランカではゴール県で障がいを持つ人々の職業訓練または家庭菜園を通じた自立支援活動を継続する。東部の内戦被害地域での生計再建支援のための新規事業を開始する。

ボランティア育成事業

スリランカをはじめとする海外支援事業の現場へボランティア派遣を継続して行い、支援活動を通じて市民が支援の現場を体験しながら国際協力事業についての理解を深める機会を提供する。

国内においては企業に対しボランティア協力の呼びかけを行い社員のボランティア活動への関心を高める機会を提供する。

普及啓発事業

スリランカへのスタディーツアーまたはツアー企画を実施し、活動地域訪問の機会を提供すると同時に社会的弱者の置かれている現状を紹介し支援の必要性を呼びかける。

スリランカおよびアフリカ関係各団体が主催するイベントや催しに出展しアムルトジャパンの支援活動を紹介することで途上国の現状について啓発活動を行う。

アムルトジャパン主催の活動地域を紹介するワークショップや団体活動報告会を積極的に実施し、広報活動および途上国の現状を市民に紹介し国際協力への理解、支援を求める。





ANNUAL REPORT 2008 & 2009



6 会計報告 2008年-2009年

収支計算表 2008年1月1日～2008年12月31日

科目	決算額	備考	(単位:円)
収入の部			
1 会費収入	28,000	個人会員6名	
2 事業収入	238,730	スリランカ津波被災女性、障がい者製作商品販売	
3 寄付金収入	8,692,341	募金、寄付金収入	
4 補助金等収入	1,853,020	民間団体からの助成金等の収入	
5 その他の収入	3,069	利息等	
当期収入合計	10,815,160		
支出の部			
1 事業費			
スリランカ支援	485,167	訪問調査、商品開発支援事業等	
ニジェール支援	2,651,712	栄養失調児健康改善支援事業費用	
ボランティア育成事業	59,690	スリランカ等ボランティア派遣	
普及啓発事業	909,091	団体広報活動、イベント出展等	
2 管理費	6,783,314		
当期支出合計	10,888,974		
当期収益差額	-73,814		
前期繰越収支差額	326,149		

2008年度 特定非営利活動に係わる事業会計貸借対照表 2008年12月31日現在

科目	金額	(単位:円)
資産の部		
1 流動資産		
現金	1,581	
預金	1,332,182	
前払金	28,527	
前払費用	4,907,993	
流動資産合計	6,270,283	
2 固定資産		
事務所借入差入保証金	190,000	
固定資産合計	190,000	
資産合計	6,460,283	
負債の部		
流動負債		
預り金	726,010	
未払金	100,000	
未払費用	11,938	
前受金	5,370,000	
流動負債合計	6,207,948	
負債合計	6,207,948	
正味財産の部		
正味財産合計	252,335	
負債および正味財産合計	6,460,283	

* 国際ボランティア貯金配分金からのスリランカ事業への助成金は前受金として計上